

黑

髮

黒

髪

三部作、その一

近松秋江作

大正十三年七月十一日印刷  
大正十三年七月十五日發行

(定價壹圓五拾錢)

◀ 腿 黑 ▶

著者 近松秋江

發行者 佐藤義亮

東京市牛込區矢來町三番地

發行所 新潮社

電話牛込  
八八八八  
〇〇〇〇  
九八七六  
番番番番

番二四七一(京東)替振

印刷所

東京市小石川西江戸川町  
電話小石川五九二番

富士印刷株式會社

印刷者 佐々木俊一

## 近松秋江君

考へて見ると君は隨分ふるつはもの古兵だ。獨歩や花袋の自然主義時代から今日に至る迄、君の文壇の生命は明治大正の兩期に跨つてゐるではないか。さうだ、僕が小説「少年」を雜誌「昂」へ出したのはもう十四五年前のことだが、その時君が國民新聞の月評欄で、あれを褒めてくれたのを僕は未だに忘れずにゐる。あれはその後永井さんからも褒められたけれど、兎に角僕の眼に觸れたのは君の批評が最初であつて、當時漸く文壇へ踏み出したばかりの僕は、それが大變うれしかつた。僕の歳があの時二十五だつたから、君は多分三十を越してゐたことだらう。

正直に云ふが、僕は一としきり君を好かないことがあつた、が、近頃君の發表するものは、小説は勿論、何げなく書き捨てたやうな隨筆にしる、一つとして僕の心を動かさないものはない。君は臆病な性質のやうだが、その實長い年月を回顧すると、可

なり剛情に生きて來た人だ。それも意志の頑強な、壯健な人なら知らぬこと、失禮ながら精神的にも肉體的にもいろいろ缺點を持つてゐる君が、失戀、孤獨、貧窮、嘲笑、——さう云ふさまざまな試練に遇ひながらヘタバツてしまはずに、いや、ヘタバツたのかも知れないが、ヘタバリながらも、満身に創痕を浴びながらも、チツと堪へて生きて來たのは、全く偉い。君こそほんとうに古兵だ。君が苦しく、やるせなく、悲しかつた人生の戦から、血を以て購つた藝術が、讀者の胸に眞實の響きを傳へるのは寧ろ當然過ぎることだ。

小説「黒髪」は戀する女に欺かれた一人の男の煩惱を材としたものだが、若し此れを讀んで此の主人公を馬鹿だと云ふ者があつたら、僕は聲を大にして云はう、「さう云ふ貴様こそ大馬鹿者だ」と。僕がほんとうに君を尊敬し、君に對して帽子を脱ぐ氣になつたのは、此の小説からだ云つてもいいくらゐだ。

秋江君、人生に於いても文壇に於いても君の後輩たる僕が、——嘗ては君に推奨して貰つた僕が、君のすすめに依つて此の書物に序することになつたのも何かの因縁かも知れない。君のやうな古兵ふるつほものに比べれば、僕なんかは甘い者だ。

大正十三年三月

六甲山麓にて

谷崎潤一郎

黑

髮

近

松

秋

江





……その女は、私の、これまでに數知れぬほど見た女の中で一番氣に入つた女であつた。どういふ所が、そんなら、氣に入つたかと訊ねられても一々口に出して説明することは、むづかしい。が、何よりも私の氣に入つたのは、口のきゝやう、起居振舞ひなどの、わざとらしくなく物靜かなことであつた。そして、生まれながら、何處から見ても京の女であつた。尤も京の女と云へば、どこか顔に締りのない感じのするのが多いものだが、その女は眉目の邊が引縮つてゐて、口元なども屢々彼地の女にあるやうに弛んだ形をしてをらず、色の白い、夏になると、それが一層白くなつて、じつとり汗ばんだ皮膚の色が、ひとりでに淡紅色を呈して、いやに厚化粧を賣り物にしてゐるあちらの女に似ず、常に白粉などを用ゐぬのが自慢といふほどでもなかつたけれど……彼女は、そんな氣どりなどは少しもなかつたから……多くの女のする、手に

暇さへあれば懷中から鏡を出して覗いたり、髪をなほしたり、又は紙白粉で顔を拭くとかいつたやうなことは、ついぞなく、氣持ちのさつぱりとした、何事にでも内輪な、どちらかといふと色氣の乏しいと云つてもいゝくらゐの女であつた。

そして、何よりもその女の優れたところは、姿の好いことであつた。本當の背はさう高くないのに、ちよつと見て高く思はれるのは身體の形がいかにもすらりとして意氣に出來てゐるからであつた。手足の指の形まで、すんなりと伸びて、白いところにうす蒼い靜脈の浮いてゐるのまで、一入女を優しいものにしてみせた。冬など蒼白いほど白い顔の色が一層さびしく沈んで、いつも銀杏がへしに結つた房々とした鬢の毛が細おもての兩頬をおほうて、長く取つた鬘が鶴のやうな頸筋から半襟に被ひかぶさつてゐた。

それは物のいひ振りや起居たちよと同じやうに柔和な表情の顔であつたが、白い額に、いかつくないほどに濃い一の字を描いてゐる眉毛は、さながら白沙青松ともいひたいくらゐ、秀でゝ見えた。けれど私に、何時までも忘れられぬのはその眼であつた。いくらか神經質な、二重瞼の、

飽くまでも黒い、賢さうな大きな眼であつた。彼女は、決して、人に求めるところがあつて、媚を呈したりして泣いたりなどするやうなことはなかつたけれど、どうかした話のまはり合せから身の薄命を省みて、ふと涙ぐむ時など、じつと黙つてゐて、その大きな黒目がちの眼が、ひとりでに一層大きく張りを持つてきて、赤く充血するとともに、さつと露が潤んでくるのであつた。私は、彼女の、その時の眼だけでも命を出して彼女を愛しても厭はないと思つたのである。その頃は年もまだ二十を三つか四つ出たくらゐのもので若かつたが、商賣柄に似ぬ地味かまじな好みから、頭髮の飾りなども金あしの簪かんざしに小さい翡翠の玉をつけたのをよく挿してゐた。……

## 二

それは、その女を知つてから、もう四年めの夏であつた。夏中を、京都に近い畿内のある山の上に過した。高い山の上では老杉の頂から白い雲が、碧い空のおもてに湧いて、八月の半ば

を過ぎる頃には早くも朝夕は冷い秋めいた風を身に覺えるやうになり、それとゞもにそゞろに都會の生活が懐しくなつてきた。夏の初、山に行くまで、東京から京都に来ると、私は一ヶ月あまりその女の家におたのであつたが、又近いうちに山を下りてゆくといふことを云つてやると、女からは簡単な返事が來て、少しく事情があつて、まだ自由な身でないので、内證の男を自分の處に置いとくことは方々に對して憚りがある。夏の時は、一年半も會はなかつたあとのこと、あれは格別に主人の計らひで公けにさうしたのであつたが、度々といふわけにはゆかぬ。そのうち此方から何とか挨拶をするまで、京都へは來ないで、すぐ東京の方へ歸つて居つてもらひたいといふのであつた。

けれども私は、どうしてもそのまますぐ東京へ歸つてゆく氣にはなれなかつた。そして九月の下旬に山を下りて紀伊から大阪の方の旅に二三日を費して、佗しい秋雨模様の、ある日の夕ぐれに、懐しい京都の街に入つてきた。夏の初、山の方に立つてゆく時は女の家から立つていつたので、長い間情趣のない獨り住居に飽きてゐた私は、暫くの間でも女のお家にゐた間のしつ

とりした生活の味が忘れず、出来ることならば直ぐ又女の處へ行きたかつたのだが、女は九月の初に、それまでゐた餘處の家の二階がりの所帯を疊んで母親はどこか上京邊カミキヤウの遠い親類にあづけ、自分の身が自由になるまで、少しでも餘計な錢の入るのを省きたいと云つてゐた。そのくらのことならば、私の方でも心配するから、夏のをはりに、自分が又山を下りてくるまでお母さんは、やつぱり此處の家へ置いて、所帯もこのまゝにして居るやうに云ひ置きもし、手紙でも度々そのことを繰返しいつて寄越したにもかゝはらず、たうとう家は一時仕舞つてしまつたと云つて來てゐたので、私は懐かしさに躍る胸を抱きながら、その晩方京都に着くと、荷物はステーションに一時あづけにして置き、まづ心當りの落着きのよさうな旅館を志して上京カミキヤウの方をたづねて歩いたが、どうも思はしいところがなく、さうしてゐるうちに秋の日は早くも暮れて、大分蒸すと思つてゐると、疊つた灰色の空からは大粒の雨がぼつり／＼と落ちてきた。

どこか親し味のある取扱ひをして泊めてくれるやうな處はないだらうか。女はなぜ、あの二階

借りの住居を疊んでしまつたやう。自分は、五月から六月にかけて一ヶ月ばかり彼女の處にゐる間に健康を増して、いくらか體に肉が附いたくらゐであつた。しかし、もうあそこにゐないと云へば、これから行つてみたところで爲方もない。母親はどこにゐるのだらう。尤も女に逢はうとおもへば、すぐにでも會へないことはないが、さうして逢ふのは、つまらない。

そんなことを考へながら、ともかくも、これから暫くゆつくり滯泊するところが求めたいと思つたけれど、そのほかに心あたりもなく、爲方なく又奥まつた處から、電車の通つてゐる方へ出てくると、その電車は丁度先に女のゐた處の方にゆく電車であつたので、今はそこにゐても居なくても、やつぱりそつちの方へ引着けられてゆくやうな氣がして、雨も降つてくるので、そのまま電車に飛び乗つた。そして東山の方をすつと廻はつて祇園町の通りを少しゆくと、そこに彼女の居た家があるので、その近くの停留場で電車を降り、夏の前暫くゐて勝手を知つてゐる、暗い路次の中に入つていつて見たが、門は締つてゐて、階下の家主の老女もゐる氣配はせず、上の、女のゐた二階——自分もそこに一ヶ月ばかり女と一つ部屋にゐた——は戸が締つ

て火光も洩れてゐない。

「まあ、しかし、それは明日になつてからでもよい。」

さう思ひながら、なるだけそこに近い處に宿を取りたい、暫くの間でも好きな女と一緒にゐた、懐しい場處から遠く離れたくない氣がして、そこから少し東山よりの方へ上がつていつた處にある、とある旅館にいつて泊まることにした。それといふのも、その旅館へはその女とも一緒によく泊りにいつたことのある馴染ふかい家であつたからだ。そのあたりは、そんな種類の女の住んでゐる祇園町に近いところで、三條の木屋町でなければ下河原といはれて、祇園町の女の出場所になつてゐる洒落れた土地であつた。それは東山の麓に近い高みになつてゐて、閑雅な京都の中でも取り分けて閑寂なので人に悦ばれる處であつた。

その前の年の冬にも東京から久しぶりに女に逢ひにいつた時にも、矢張その家へ泊つたが、私はその時分のことを忘れることが出来ない。急に會つて話したいことがあるから來てもらひたいといふ手紙を、女から寄越したので、一月の中ごろであつた、私は夜の汽車で立つていつた。スチームに暖められた汽車の中に假睡の一夜を明かして、翌朝早く眼を覺ますと、窓の外は野も山も、薄化粧をしたやうな霜に凍てゝ、それに麗かな茜色の朝陽の光が漲り渡つてゐた。雪の深い關ヶ原を江州の方に出抜けると、平濶な野路の果てに遠く太陽をまともに受けて淡蒼い朝靄の中に霞んで見える比良、比叡の山々が湖西に空に連らなつてゐるのも、もう身は京都に近づいてゐることが思はれて、ひとりで胸は躍つてくるのであつた。そして、幾ら遠く離れてゐても、東京に靜つとしてゐれば、諦めて落着いてゐる筈の、いろ／＼の思ひが、汽車の進行につれて次第に募つてきて、はては惱ましいまでに不安に襲はれてくる。

「女はいゝ鹽梅に家にゐるだらうか。此間中から大阪などへ行つてゐて留守ではなからうか。大阪には一人深くあの女を思つてゐる男があるのだ。……自分が女を始めて知つた時の夏であ



つた。その男に招かれて、女が向うの座敷にいつてゐる時、ちやうど上の木屋町の床で、四五軒離れた處から、二人とも今湯を上がったばかりの浴衣姿で、その男の傍に女が来て坐つてゐるところを、遠見に見たことがあつた。その時さながら身を熬るやうな惱ましさを覺えたことがあつた。それを思うても、何が苦しいといつて戀の苦しみほど身に徹へるものはない。……どうか家に居つてくれて、すぐ逢へればよいが、昨夜は、かうして、自分は汽車に一夜を明かして、はるくゝの東京から逢ひに来たのである。女はどこへ、どんな人間の座敷に招ばれていつたらうか。まだ朝は早い。朝の遅い廊では今ごろはまだ眠つてゐるであらう。」

そんなことが綿々として、後からあとから思ひ浮んで、汽車の座席にじつとしてゐるに堪へられないくらゐになつた。私はそのあたりから頼信紙をとり出して、十一時までには必ず加茂川べりのある家に行き着いてゐるからといふ電報を打つて置いた。そして京都驛に着いたのはまだ八時頃であつたが、どんよりとした曉靄は朝餉の炊煙と融合ひ、停車場前の廣場に立つて、一年近くも見なかつた四圍の山々を懐しく眺めわたすと、東山は白い靄に包まれて清水の塔が